
世界ってなんだよ

あきくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界ってなんだよ

【Nコード】

N0815C

【作者名】

あきくん

【あらすじ】

少し不思議の略であるSFです。それに、ものすごく広域でわたしはSFを捉えています。しかし、それでもぜんぜんSFじゃないような気がする話になっています。ですがいいんです。ギャグだろうが、ラブコメだろうが、真面目な話だろうが、それらが中途半端に混ざっているように、わたしとしてはやっていることは一緒のつもりですから。そんな話です。

世界ってなんだよ

隣の机からシャープペンが転がり落ちる。

百円シャープか・・・っと。

ぼくは反射的にそれを空中でキャッチすると、お隣さんである友人に、

「ほれっ」

と普通に差し出す。そう、あくまでも普通に。どんなに、反射的に半分イスから落ちそうになりつつキャッチ、などという後ろの人びつくりな状況でも、渡すときには体勢を立て直し平静を装っている。もちろん、恥かしいからスルーしてくれと、念を送るのを忘れずに。

そんなぼくの様子を怪しんでか、友人は妙な笑顔でシャープペンを受け取りつつぼくの顔を覗き込んだ。

そんなに見つめられると照れるじゃないか・・・。

などと思いつつ、これはこれで恥かしいので目をそらそうとしたとき、

「ちよつと訊きたいんだけど、きみはこれからどうするんだい？」

「はっ・・・？」

友人の唐突かつ予想外な問いかけに、ぼくの思考は一瞬止められ、すぐに高速回転を始めた。視線は妙にゆっくりと下方に移動しているが、まだ友人とぶつかっている。

これからって放課後、はたまた帰宅後、もしかて人生設計のことなのか。明るい家庭？楽しい未来？いやそれよりも、ぼくの華麗なシャープペン救出劇は無視なのか。まったく、さっきの笑顔はなんだったんだよ。いやいやいや気づいてないわけはないだろ、無視されると余計恥ずかしいじゃないか。って話題にされるのもヤだけど・

・・・じゃ、な、く、て、これからだよこれから。

シャープペンはないのに、いまだに同じ姿勢で固まっている自分の手を見つめつつ、ぼくはただただ考えた。そして一つの結論にたどり着く。忘れてはいるけど友人と遊ぶ約束をしていたのではないかと。これならば先ほどの友人の問いの意味も解る。遠回しに何して遊ぶかを聞いているのだろう。

だが、

「さあ勇者よ。きみのおかげで世界は救われたんだ。事後処理も終わったし、そっから先は？」

違った！はははは、じゃねえ！

おかしい。こいつの言っていることはどこか、いやおもいつきりおかしい。思わず自分に突っ込みを入れるほどおかしい。

ここは学校だ。しかも剣や魔法のファンタジーな学校ではない。何の特別な力もないただの人間の学生が、勉学に勤しむ・・・、かどうかは別として、とりあえず普通の学校だ。

そんなところに勇者がいるはずもなく、だいいちどんな学校であってもそもそも学校に勇者がいるはずないような・・・。いや、論点がおかしい。

・・・よし。とまあ落ち着こう。

どこから友人はおかしくなったのか。それは・・・、まあ最初からだだが、今回の場合は妙におかしい。妙といえば、友人の妙な笑顔には、これから妙な発言をするという意味が込められていたのだろう。今思えば友人は真剣におかしいことをいつている節があるような気もする。ということはあるだ。

そうか・・・。

何かがぼくに降りてきた。

「んー・・・。お前さま、何の話をしているんですか・・・」

ぼくは何の表情も作らず抑揚無く敬語で返した。もはや考えるだけ無駄だと悟ってしまったのだ。しかし、ぼくの態度の変化を友人はさほど気にしていないようだった。さっきからの無視っぷりを加

味するに、どうやら友人はぼくに興味がないらしい。

「そうなるよね」

たんとんとし、一人で納得する友人。

お前の頭はファンタジー!!!

考えないと悟った矢先に感情が爆発したぼく。いつの間にか握られているこぶしが震える。・・・もはやこれまで。本気で友人と戦うしかない。

いくぞ、渾身の一撃!

「だから！わけわかんねえって」

友人はびつ、と人差し指をぼくの口の前に持つてくるだけで簡単に攻撃を止め、

「物語の主人公たちは、世界を救った後なにをするんだい？」

上目使いで覗き込むように静かに語りだした。何かいってやりたかったが適当な言葉も見つからず、ぼくはとりあえず感情をねじ込むように腕を組み、友人の語りをきいてみることにした。

きっかけはどうあれ、世界を救うことになった者。彼は世界中の協力を得て世界の敵に挑む。ついに世界を救った勇者はお姫様と結婚、もしくは世界を回って歓迎される。そこまでは物語としてもあるが、その後勇者が何をしたのかは聞いたことがない、とのことだった。

どうやら友人は、その後どう余生を暮らすのモノか知りたらしい。それが最初の、これから何をするんだい、という質問で、勇者としても今後の身の振り方に困るのではないかという友人の同意が、そうなるよね、だったようだ。言われてみればつじつまが合うにやるほどね・・・。空が見たい・・・。

ため息とともに、ぼくは前方やや上方を見るともなしに見つめる。見つめるといえば、話の最中友人の目を見るとちゃんとぼくを見据えていた。どうやら友人は、思考以外はまともなようだった。思考以外は・・・。ともあれぼくは、ようやく正しい答えにたどり着いたのだった。

ぼくはすばやく顔を友人の方に向け、放心しかけた自分の心を無理やり起こした。友人と目が合うが、この際気にしない。半ばあきれていてもしかたがないし、ぼくが黙っている必要も無い。湧き上がってくる怒りを気力の回復に注ぎ込んで友人に意見する。

「小芝居だったのかよ。お前の頭を疑いかけたぞ」

実際は、お前の頭はフアンタジー、なんて思いもしたが友人として伏せておく。ちなみに小芝居というのも、自己陶醉癖野郎をだいぶソフトにした言い方である。もちろん、そんなことも伏せておく。「それでどんなことがあるんだい？」

うっ、無視かい……。

友人は再びぼくを完全に無視しつつ、それでいてぼくに答えを求めてきた。せかっくもち直そうとしていた気力が、なんだかなえてくるようで悲しい。

なんとというか、いつのまにか完全に友人に飲まれているような気がする。冷静になって始めて解る自分の状況、というやつだ。さきほどからぼくでも驚くほど喜怒哀楽に富んでいる自分がいるし、それを痛感しても何ら解決策が浮かばない自分がいる。単に友人を無視すれば終わるのがわかっていても、それもなぜかできない。そうなのだ。悲しいことだがぼくはすでに友人の手の上で踊っている。

「いや、ぼくが知るわけないだろ」

いい加減にしてくれ、と今更ながらぼくは冷たくあしらって抵抗を試みた。もちろんそんなことは無駄だと解っているが。

やはりというか、しかし友人はしつこかった。

帰り道。いつもは違う道のはずなのに、今友人はぼくの隣にぴつたりと付いて歩いている。そして、

「さあ、さあ」

と、ぼくの袖を引っ張りつつしょうもないことへの答えを求めてくる。いったいぼくにどうしろというのだろうか。適当に話そうにも思いつきもしないし、なによりそんな興味のないことを考えるのもばかばかしい。だいいち、世界を救ってめでたしめでたし、で良い

ような気がすごくする。

うわ、くだらねえ……。

ぼくはため息をつき、手で顔を覆う。やはり付き合ってやりすぎたのが問題だったようである。今更後に引かしてもらえそうも無いし、さてどうするか。ぼくに興味が無いくせにどうしてこうもしっこいのだろう。

ぼくは何かいい手はないかと周りを見回してみる。しかし人気の無い路地に何の助けもあるはずも無く、あきらめて前に向き直る。そして前方にいる一人の女の子をなんとなく眺めていると、

「おおっ」

風でスカートが……。

白！

白の女の子はすばやくお尻を押さえつつ足を止め、きよるきよると回りを探る。どうやら誰かに見られてはいないか確認しているようだ。その様子はなかなかかわいい。そして白の女の子の状況確認はついに後ろにおよんだ。目が合う。思わず立ち止まったぼくは、今どんな顔をしているのだろうか。少なくとも、一瞬で前を向いて歩き出した白の女の子には、スケベな顔にうつっているはずだ。何しろ、いつの間にか白の女の子なんて呼んでいるのだから、まともな顔のはずが無い。

「変な顔してどうしたんだい」

白の事件に気がつかなかったのか、友人はぼくの前に立ちふさがり不思議そうに顔を覗き込んできた。ぼくは無言で友人の額を手のひらで押して遠くに離し、なんとか平静を装う。やはり変な顔だったようだ苦笑しつつ、ともあれ、白パンツの君、なんて素敵な名前をつけなくて良かった。あやうく変な顔ではすまなくなるところだった。

。しかしラッキー……。なのか？いまだにこいつはうるせえし……。

幸運と苦渋をかみしめるぼくはどこか自暴自棄になっていたのだ

ろうか。それとも白の事件は物語の次へのステップの扉だったのか。このとき、なんかとてもいい案、が浮かんできた。

「じゃあ試してみよう。世界なんていつでも大なり小なりあるもんだ。あの娘！」

ぼくはひじを伸ばし華麗に指差す。その先には早足で遠ざかつていくかわいいあの白の女の子。ぼくのテンションは妙に高く、妙な開放感もあり、そして終わってもいないのに妙な達成感があった。

「わがクラスの人気者だね」

そう、実は何を隠そう白い女の子はぼくの知人なのだ。しかも友人がいうように、男衆の人気が高いつきている。そして、そんな白い女の子を使ったなんかとてもいい案とは、

「今からあの娘を襲う。で、おまえが助けに来ると」

これだ。こうなったら疑似体験でいくしかない、と啓示があったような気さえする。ともかくこれ以上の妙案は無いはずである。まさに怪我の巧妙ならぬ、パンツの妙案、だ。

世界の最小単位はきつと自分自身だ。ぼくは友人に悩まされる中で白の事件で、確かに自分の中に宇宙を感じた。それが単なるスケベ心の再確認であったとしても、そこには友人が現れることのできないほどの確固たるものがあつたのだ。もちろん内面だけではなく外側にもそれは当てはまる。そこで思いついた。個々という世界があるなら、それを壊すことも救うことも可能なはずだ、と。

友人はどこかつまらなそうだがうなずく。きつとぼくの意図を察してくれたのだろう。

「自分の世界ってことかね。まあ任せるよ」

友人は一瞬ぼくを見つめたかと思うと、思いのほかあっさりと目をそらした。

お前が言い出したことなのにやけに受動的じゃないか。いいさ、いくぜ！

ここからは、カッコ良くいこう。ぼくは、・・・いや、おれは、でいったほうがいいか。

おれは獲物を山よりも動かずに慎重に視界に入れると、風よりもすばやく林よりも静かに移動し、火よりも華麗に逃げ場を奪う。つて、大げさすぎた。

「おれは今からお前を襲う！」

ともかくおれは、白の女の子の正面に立ちふさがると高らかに宣言した。気分は上々だ。白の女の子はそんなおれの言動に驚いたのか、その場で足を止め不思議そうな顔でおれの表情を読もうとしている。友人なのだから何かの冗談だとも思っているのだろうか。だがおれの表情からは、本気だということ意外は伝わることは無い。非常に優越感がある。

白の女の子は片足を少しだけ後ろにずらす。それだけの行動でおれには白の少女の不安が伝わり、自然と笑みが浮かんでくる。そして恐怖を与えるようにじりじりと、戸惑いを見せる白の女の子に近づき、ゆっくりと手を伸ばし、

「む……」

一時停止。

しまった！！どう襲うか考えていなかったじゃねえか。

焦るおれ。気合で外見だけは崩さないようにする。白の女の子は気づいていないのか、不安そうにおれの手の行方を探っている。

シリアスが続かねえのか、おれってやつは！

選択肢は二つ。強盗でいくか、スケベなにーちゃんていくか。そのどちらかでだいぶ違うことは確かだが、おれの今のテンションからだと勢いでやったほうが良かったような気がする。無駄に考える悪い癖。こんな時くらいカッコ良くいきたかったのだが。

おれは間を持たせるためにできる限り鋭い眼光で白い女の子をにらみつける。これでしばらくは白の女の子に怪しまれることも無いはずだ。

ってちがうだろ、それは！……そうだ！おれは何をしようか迷ってんじゃねえ。これは恐怖をあおる為の間を取っているんだ。演出だ！

おれは自分にそう言い聞かせると、白の女の子のその華奢な肩に指を触れさせ、それに驚いておれを見上げる視線にさらに力を込めて眼光を浴びせた。

「や……」

思わずの行動だったのだろう。白の女の子は言葉にならない悲鳴をかみしめつつ、すり足で半歩退いた。先ほどと似た動きだが、今回は戸惑いや不安ではなく明らかに身体をかばう行動だ。

ふっ、いいじゃねえか。そうか、そっちがいいのか。白の女の子よ。おれもそのほうがいい！

おれは白の女の子を、……ええい面倒だ。おれは女を押し倒し肩をつかみ、含み笑いで見つめる。組み敷かれた女の身体は心なしか小刻みに震え、それがおれに伝わると妙な快感と共におれの魂を震えさせた。

少し楽しもう……。

おれは女の肩から手を離しいったん身体を起こし、動けないように身体を跨いだまま上に座ると、女を見下ろす。体温、筋肉の動きや心臓の鼓動、そしてぶつかる視線。押し倒されたままの格好で、右手は投げ出され、左手は胸の上であり、そこから動かす様子も無い。ただ表情だけは形容しがたい変化があり、特におれを見つめる目にはうつすらと涙が浮かび、それが妙に艶っぽさを感じさせる。これが、そその、というものなのだろう。しかし追い詰められた女というのは普段よりもかわいく見えるから不思議だ。あまり体重をかけないようになっているのはおれの優しさだろうか。

やるか……。

ふとした思い付きのように、心静かにおれは行動を開始する。おれは左手を、初めはゆっくりと徐々に早くしながら女の顔に近づけ、最後は激しく手のひらを女の顔の真横に叩きつける。

「ひっ……」

砂埃が舞う中おれは真上から女の顔を捉えた。目が右手で女の顔をなで、指先を顔から首へと滑らせていく。その手を追う女の視線

や表情を楽しむように、おれは女の顔を見続けている。指先に感じるきめ細やかな暖かい肌の感触が、制服の繊維のそれへと変わり、ついには再び肌の感触へと変わる。胸に置かれた女の手に触れたのだ。

おれが手を重ねると、ぴくつ、と短く女の手が動いた。少し力を入れてみると、半分くらいは女の手を通してだが、やわらかい感触が感じられる。

「あうっ……」

押し込まれた女の声。おれは女の手を跳ね除け夢中で膨らみかけた胸をつかみ、

「んっあ……！」

その声に思わず手を放す。

なんだ？おれは何をやっているんだ……。なんかおかしくないか……？。

疑問や動揺を感じながらも、おれの手は何かを求めてさまよっている。それでも失いかけた理性が徐々にだが戻ってきているようで、妙に引っかかりを感じてなのか、おれは先ほどのような思い切った行動ができないでいる。

おれは自分の手の動きに視線を合わせる。おれの手は再び胸を、

「や……」

いやスカートを、

「きゅん……」

いや足を、

「んん……」

いやいや服を、

「どうするんだ？おれは」

いやいやいや己の頬を思いっきり殴った。

ぐっ！

痛みが頭をスッキリとさせ、一時冷静に楽しんでいたのが嘘のように、おれの心に不安が広がる。これはなんかおかしいなんてレベ

ルのものじゃない。原因はよくわからないが、誰かさんのことをおかしいと言えないほど、おれは確実におかしくなっていた。悪役のはずが、真の悪になっていた。

やべえ！いつの間にか本気になってるけど、これって演技のはずじゃねえか！おれはなんてことを……。違つぞ。これは妙案なんかじゃねえ。おれは、じゃねえ！ぼくは何を血迷つてたんだ。

そもそも、なんかとてもいい案、なんて変な言いまわしのものが良いはずが無い。自分を取り戻したぼくは、今更ながらとりあえず自分のおろかさを痛感し、この状況を打破するために勇者役の友人がいるはずの方にヘルプの視線を送る。

おい。助けに来いよ。これ以上はマジでやばいぞ……。

この助けに来いというものの対象は、もちろん白の女の子のことだが、同時に僕のことでもある。

「……」

しかし、頬の痛みが完全に引いても一向に友人は来る様子が無い。気まずいなか組み敷いている白の女の子を見ると、なんだか熱い瞳でぼくを見つめている。思うに白の女の子のこの目は凶器だ。

「うっ……。これは……」

限界だ……。つか、なんであの野郎来ねえんだよ！よく考えりやあいつが原因じゃねえか！おぼえてるよ！

口から飛び出そうなくらい高鳴る心臓を無理やり押し込めると、

ぼくは軽く息を吐き出し、外見だけは平静を装う。

よし！逃げよう。

最低な感じはするがきつと最良なはずだ。他になにも思いつかないのだから、唯一の選択肢に賭けるしかないのだ。

ぼくは無言で、乱れてしまった白の女の子の服を正してあげると立ち上がり、

「スタンダップ……」

紳士のように手を貸して白の女の子も立たせてあげ、

「あらあらこんなに汚れちゃって」

さらにオバちゃん口調で服や髪に付いた砂をはらってあげ、

「よし、さてぼくはこれで失礼するよ。それではまた明日……。
ごきげんよう」

おほほほほ……どこかの令嬢よろしく、呆けた白の女の子を残しさりげなく去っていく。ぼくの行動が、白の女の子を上から見たようになってるのは、彼女が妙に受身だったからだ。

回避成功。とりあえず白の女の子はぼくを追う様子も無く、声を上げることも無いようだ。多分、突然のぼくの行動に呆気にとられているだけだろう。だからこの空気を変えないように、走り去りたい気持ちを抑え、ぼくは振り向くことなく大きく少し早めに歩いていく。

うとう、つらい……。

「どういうつもりだ！あほっ！！」

背中に痛いほど視線を感じながら、逃げるように早足でわき道に入り、そこで発見した友人の手を掴みすべてを発散するようにダッシュ。途中友人が遅れそうになっても、力を入れて友人の手を引っ張り無理やり走らせる。そして程よく白の女の子から離れると、ぼくは息を整えるのもそこそこに一も二も無く怒鳴ったのだった。

「はうつ。はあ……。だってあの娘期待してたし……。ふう……。だいたいどうしてきみはあの娘を選んだんだい？」

つらそうに肩で息をしながら、多少歯切れの悪さがありながらも別段悪びれた様子も無く、相変わらず同じ態度でぼくを見る友人。腹は立つが、これでは何をいっても無駄だろう。しかしいつたい誰が期待していたというのだろうか。不思議そうに見ても、友人はぼくにつかまれた手をさするのに忙しいようで、すでにぼくを見ていない。ぼくにはその友人のいつもと同じような態度が妙に不自然に見えた。

「仲いいから、後で事情話せば許してもらえろと思っただよ！」

怒りつつもつい答えてしまう自分が悲しいが、極度の緊張から開放されすがすがしいせい、別に気にならない。それよりもむしろ、

友人に変に無視されるほうが気になって、語尾を強めることで注意を引こうとしている認めたくない事実のほうが衝撃が大きかったりする。

何で友人のことが気にかかるのか。それは友人がおかしな態度をとるから。せつかくできる限りの悪口雑言、罵詈雑言をもって、先ほどのぼくの計画ぶち壊しの文句をいってやるうと張り切っていたのに、これではぼくのほうまで調子がくるってしまふ。

友人は思惑どおりまっすぐぼくを見つめてくる。その目には明らかにいら立ちや怒りが込められているが、そんなことの原因がぼくにわかるはずも無く、

「何だねその安全思考の事なけれ主義は！それじゃ真の救世主にはなれないよ！」

普段のぼくなら普通に怒るであろう友人の言葉をきいても、やっぱり無視されていたほうが良かったのではないかと心から思いたいおすことができない。友人はぼくのやり方に怒っているだけで、おかしいというの勘違いだったと思いたいのだが、どうも違うような気がする。

何なんだよ、いったい！

確証は無いがどこかおかしいという微妙なところに、ぼくは妙にいら立ちを覚えた。

「ぼくが真の犯罪者になるだろうが！」

それでもぼくの口は自然に怒っている。これは売り言葉に買い言葉だ。切実な問題ではあるが、考えて言ったわけではない。怒鳴った後で上手いこと言ったものだと思いついたが、友人の言う真の救世主と、真の犯罪者を掛けた洒落のつもりももちろん無い。

しかしあれだ。よく考えると、いやよく考えなくても、こんな友人のことより白の女の子にどう説明するかの方がよっぽど重要だ。最悪のことを考えると背筋が寒くなってくる。

ははは・・・。明日どう謝りゃいいんだよ。・・・ってさっき謝っちゃえば良かったじゃねえか！

後の祭り。後悔先に立たず。日本語って便利な言葉が多いな・・・
。ぼくの頭の中は、今とても静かだ。

「はっ・・・。相思相愛なんじゃない？好きにすればいいじゃないか！茶番に付き合う気はないよ」

友人はぼくに背を向けると、すたすたと歩いていく。

あっ？やつぱ、ちよつとおかしいな。ってか、なんでこいつはやけに意味深な行動をとるんだ？

「何でお前が怒ってんだよ・・・」
わけわかんねえ。

しかし確実に友人は怒っている。なぜか解らないがすねているようにも思える。ぼくはなんかつまらない。

友人は足を止めるが振り向かない。

「本気だった。忘れてたし・・・」

友人はそう、ぼつりとつぶやいた。これはきつと、ぼくがさつき友人のことを忘れていたこと、のことを言っているのだろう。それがいったい・・・。

・・・！それか！なるほど、気づいていたか友人よ。そりゃ、怒るわな・・・。

「いやいやそんなことは無いぞ！ぼくはあくまでお前の疑問を解決するために一芝居うつっていただけだよ。間違っても忘れていたわけじゃないしそれに、・・・ああ！もういいや」

弁解するのも面倒になり、ぼくは力なくその場にしゃがみこむ。疲れが一気に出たような感じた。ともあれ友人の態度の原因がわかった今は、残された問題は一つ。

ああ、明日どうしよう・・・。

ぼくは未来を探るように地面をじつと見る。

ふいに地面が暗くなる。

「反省しているならきみを許してあげよう」

「そりゃ、ありがと」

友人の影がぼくを覆うと、頭になにか乗っかってくる。落とした

視線を前に向けると目の前に友人の靴と靴下。どうやらぼくの頭に手を乗せているようだ。

「そんなに落ち込むんじゃないよ。一緒に謝ってあげるからちょっとむかつく・・・。」

しかしこれで無理に謝らせる手間も無くなった。上から見られてる気もするがこの際仕方が無い。それに、友人にもぼくのことをほんの少しでも考える心があつたことが嬉しかったりする。もちろん、

「無理にでも謝ってもらうからな」

一応念は押しておく。

ふふふ。明日になって気が変わったとはいわせねえ。そうだよ、別に無理やりでもいいんだ。ぼくの人生かかってんだから、殴つても引つ張つてって地面に頭こすり付けて謝らせてやる！って、そりゃないか。ああ、まいいや。なんか気分よくなつたし。いやあ、あれだね。饒舌なのは心が軽いからだよ。舌いっても心の中だけど・・・。

今ぼくのテンションは急速に上がっている。

「さっきのはなんか違う気がする」

頭上から落ち着いた友人の声。ぼくのなんかいい案のことだろう。落ち込んでいるぼくを見て機嫌が直つたのか、友人は話題をつまらない疑問に戻したようだ。これにはある意味ぼくは感心した。よくもこうまでこんがらがつたというのに、自分を貫き通せるものだ。

しかし友人は解っていない。

ふふ。残念だったな！顔を伏せてはいるが落ち込んでなどいないのさ。このうつつとうしい手にも耐えてみせる。

しかし今のぼくは寛大だ。そのつまらない話題にも、そしてぼくの頭の上の手にも付き合つてやるだけの器がある。といつても、

「そんなん、ぼくもわかつてるよ。お前がしつこいから・・・わかつたよ。ぼくがいまから世界を征服するから、お前が倒しに来てくれよ」

適当に、だけど。ようやく心配が無くなって気分爽快。あしらう余裕すらあるってすばらしい。

なんかどうでもいいや。

「それできみは、仲間になれと誘うわけだ。世界の半分をくれてやるうってことで・・・」

「そうそう、お前はそれを断ってぼくを倒すわけだ、って何の話だよー！」

をっ！

まさか話をあわせてくるとは思わなかった。それをやったらぼくの負けだと思つて耐えたが、思わず目を見開いて友人を見上げるところだった。

ぼくの頭の上の手がなでるように動く。
うぜえ。

「結局つまらない日常が続くだけなんだ」

妙に真剣な友人は、世界を救った勇者の末期のことをいつているのだろう。突然の話題修正だがぼくは特に気にしない。結局友人はその話がしたいのだろうと思つてはいたし、それに、

「急に悟りかよ・・・」

「こんな話をしたきっかけは、きみが世界を救ったからなんだよ」
友人の言うことは何時も唐突だ。

「何のことだ？」

ぼくは頭の手をどけて立ち上がる。友人の顔を見るとすぐに視線がぶつかったことから、友人は黙つてぼくの動きを目で追つて待っていたと思われる。なかなか律儀だ。

「あの時マイシャープペンさんはきみによって救われた。そう、きみはマイシャープペンの世界、同時にその持ち主の世界を救った救世主なんだよ。それなのに、それから今までなにがあった！」

なるほど、ものは言いようだ。一つの世界を救うということは、同時にそれと関わる世界を救うことにもなるということだろう。今回の場合、友人のシャープペンだけでなく友人自身もぼくは救った

ようだ。

ふむ。冷静に対応できれば友人の言動も我が物にできそうだが、
ってまでよ？なにか？じゃあ、こんなことになった最初のきっか
けはぼくなのかよ。

喜怒哀楽のどの感情を使うべきか判らないぼくは置いておくとし
て、シャープペンを拾ってやっただけでここまで引つ張つてこれる
なんて、ある意味賞賛に値する。ともあれ、それから今に至るまで
のことなんて考えるまでも無い。

「別にたいしたことは・・・」

ふっ・・・。というか、ろくなことが無かつたな。

「そう、ろくな事なんてなかつた」

ははは。ぼくの心読むなよ。

「悪かつたな」

我ながら苦笑まじりとは。案外ぼく自身楽しんでいるのかもしれ
ない。

「結論。世界を救つてもそつから先は小説にもならないようにつま
らないことばっか」

「いやー、でもそれを求めて世界を救うわけだし、いいんじゃない
か」

そつだ。勇者たちはその世界が好きだから、その世界がその世界
として自分の前に在り続けるように、単にその世界を求めてその世
界を救うのではないだろうか。それに、つまらないことと後から回
想出来る事は、本当につまらないことなのだろうか。少なくともぼ
くは、事が丸く収まつたら今回のことは、友人と笑い話として語り
合つてもいいと思つている。

「ふふっ。だったら、あたしの世界を救つたきみはあたしを求め
るがいい！」

ぼくを見上げまっすぐと見つめつつ勝ち誇つたような友人。なん
か今のぼくの心境にぴったりと当てはまる言葉だ。否定することな
んで出来ないし、否定する必要も無い言葉のように思える。

まさか……。

ぼくは気持ち後ずさりする。

まさか……。友人はこういう話になるようにぼくを誘導していたのか？

すべてが一本につながった。いつの間にか世界を救う勇者の心境をぼくは考えることになり、その勇者をぼくだと友人はしている。そして世界が友人であると。しかもぼくは、それをなんの抵抗も無く受け入れられそうだ。

友人に踊らされていると時折思いながらも、まさかすべて友人の手のひらだとは思いもしなかった。それほど計算高い手練だったのか。思えば友人は何時もぼくをまっすぐ見つめていたではないか。

友人の勝ち誇った顔を探るようにじつと見る。もちろん視線がぶつかり見つめ合うかたちになる。

……。違うな……。こいつはそんな奴じゃない。

すべてが一本につながったついでに解ったことがある。それは、ぼくが正反対もしくはまったく違う風に捉えていたことだ。それは、友人のぼくへの態度。

ぼくは力を抜いて、勝ち誇った、いや実際は頬を赤らませて緊張した友人を見つめる。

頭でも撫でてやりたくなってきた。

「はあ……。世界ってなんだよ」

お前素直じゃないな……。

了

(後書き)

20070530

こんな話ですが、読んでくださってありがとうございます。

重い話は疲れるので軽くしようとしたら、こんな話になってしまいました。思いのほか長くなって、しかも書きにくくて逆に疲れました。ついでに軽い話かどうかも怪しくなる始末です。

解りにくいところがありますが、わざとそうしている部分と、わたしの力不足の部分があります。ご理解ください。

ちなみにこの話は恋の話が主な感じがします。たぶん。

意味の無いことがわたしの話の特徴ではないかと思っておりますが、これは本当に意味が無いです。困ったものです。でも、何か思うことがあってもいいですよ。想いは人それぞれですから。

ともあれ感想を頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0815c/>

世界ってなんだよ

2010年10月8日15時16分発行